

(目的) 住宅の賃貸契約,あるいは住宅の売買契約,建築契約などにおいて,(建築の知識を十分持っている人を除く)多くの人々にとって,住宅平面図から実在住宅をあらかじめ想像することは容易ではない。平面図に記載される空間的構成や諸設備などのみから室空間の雰囲気をも予測することには自ずと限界が存在するであろう。本研究では,平面図と実在住宅との間に生じやすい評価の相違点について明らかにし,平面図から予測する空間評価の基礎的資料を得ようとするものである。

(方法) 被験者103名(男子51名,女子52名)に住宅平面図を呈示し,形容詞対(31対)によるSD法(7段階尺度)で平面図の全体および各室を評価させた。その後,同じ被験者が同一平面の実在住宅へ行き,同様の評価法で住宅の各室を評価した。データはSAS統計パッケージFactorプロシージャを用いて因子分析を行い考察した。また,平均SD得点の有意差検定は t Testプロシージャで行った。なお,住宅平面図および実在住宅の評価においては,関連する事項についても調査した。

(結果) 各評価対象については,快適性,活動性,様式などが,因子分析により抽出された主な因子である。住宅平面図と実在住宅の評価においては,平面図について「広がり」などの項目に肯定的評価をするのに対し,実在住宅では予想より狭く感じている。内装や階段の昇降などについては,実在住宅で初めて注目している。住宅平面図に家具などを書き込むことにより,空間の開放感や広がりという評価項目において,実在の住宅により近づけることが可能である。しかし,書き込みの方法や書き込む家具の種類などにより,評価に多少の差が生じる。